

# 小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第33回

## スレブレニツァを訪ねる旅



イラスト・題字：長峯亜里

### ユーゴの解体から内戦へ

地中海に突き出た形に位置する、バルカン半島。その北西部にある国がボスニア・ヘルツェゴビナである。いささか長い名前だ。「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」と「スルプスカ共和国」の2つで構成されていることを知っている人はどれだけいるだろうか。筆者は、恥ずかしながら、最近になって知ったばかりだ。

しかし、その首都サラエボといえば、1984年に開催された冬季オリンピック、あるいは100年前の第1次大戦勃発につながったフランツ・フェルディナンド皇太子殺害事件が起きた場所としてピンと来る方は多いに違いない。筆者は、ちょうど10年前の2014年にサラエボを初訪問したが、ボスニア東部スレブレニツァに行くまでの時間が取れなかった。しかし、今年5月末、筆者が会員となっている非営利組織「国際新聞編集者協会 (IPI)」の年次大会がサラエボで開かれ、ロンドンからウィーン経由でボスニアを再訪することができた。今度こそは、スレブレニツァに行ってみなければと思った。

ここは1990年代のボスニア紛争末期、イスラム教徒の住民ボシュニャク人の大量虐殺(「ジェノサイド」)が起きた町である。

『戦火のサラエボ100年——「民族浄化」も

う一つの真実』(梅原俊哉著、朝日新聞出版)を参考に、ボスニアの20世紀後半の歴史を振り返ってみよう。

1945年、チトーが大統領となる社会主義の連邦国家ユーゴスラビアが生まれた。「ユーゴスラビア」とは「南スラブ人の家」を意味する。7カ国と国境を接するユーゴスラビアは6つの共和国で構成され、その1つがボスニアであった。ここでは人口の約40%をボシュニャク人が占め、セルビア人、クロアチア人も住んでいた。この3民族の間には、「生物学的な『人種』としての差は全くない」という(『戦火のサラエボ100年』)。「顔つきや見た目では決して区別できない」。セルビア人とクロアチア人はキリスト教徒で、ボシュニャク人はイスラム教徒だが、宗教の違い自体が互いへの戦いの理由だったわけではないようだ。

1980年にチトーが死去すると、民族間の対立が次第に表面化すると同時に、共和国独立への動きが出てくる。1992年、ボスニア・ヘルツェゴビナの独立を巡って民族間で紛争が発生し、3年半以上にわたって全土で戦闘が行われた。死傷者は約20万人、第2次大戦後、欧州で最悪の紛争と言われている。

紛争末期の1995年夏。スレブレニツァは国連によって「非武装地帯」と指定され、軽武装